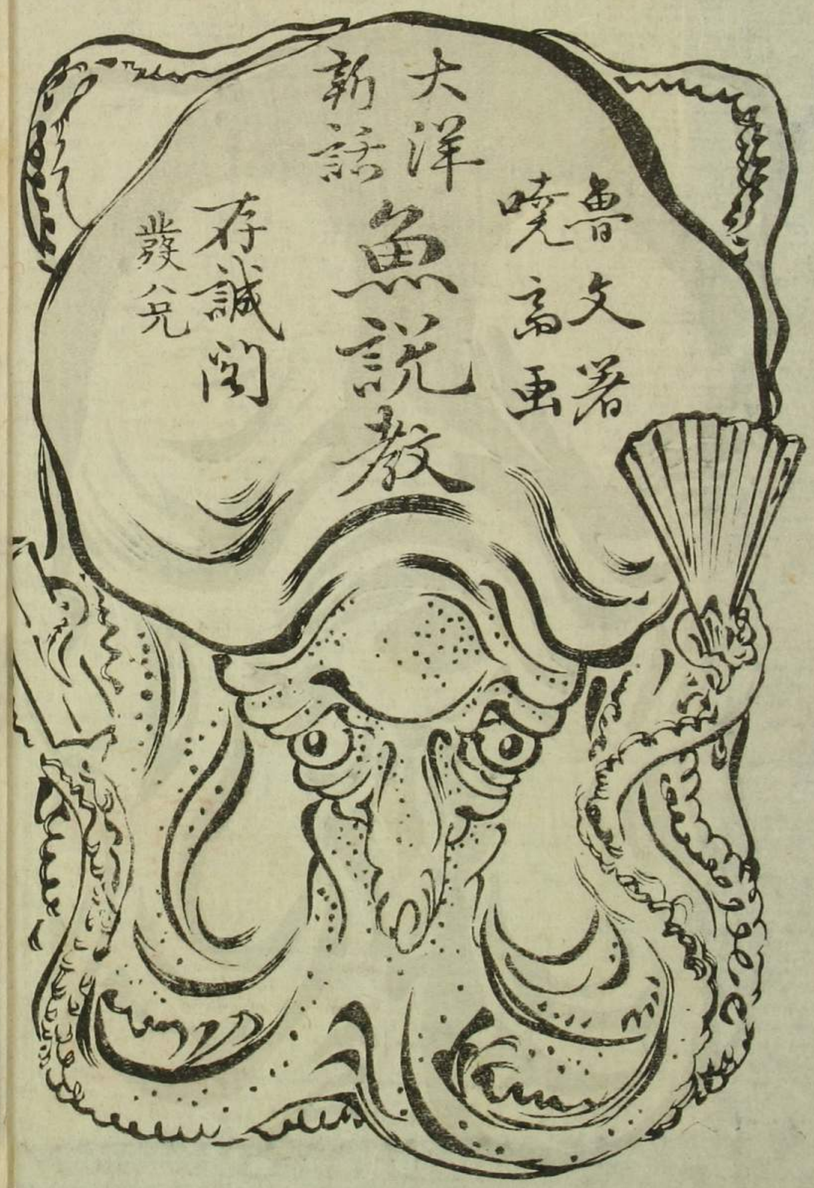
大洋新話

蜻蛉人道魚說教　第一

特
へ遠14
1958

特
1958

五十二号



大洋新話序

説説龍王宮都蒼海
名説鯉鱗蒼海不
減鯨鯨若衝浦島子
姫旦何驚乎亀乎原是以

夏子的卿の色麗筆精
臺大機関天地人外觀
了了夏情
桂園主人誠敬拭

大洋新話叙

著位郎曾文硯の涙の沫き
より深く大洋の海原の地揮り
說宮世界の新を繙り溪を
海鷺の光を授き世を開く
屈気擢巻拔き筆を

揉まぶ教の鱗雲池に踊る蛸和尚海坊主に邪山魂宗門の蛇宗門の蛇河伯の窮屈不如説教感あり以て一言を添ふ

壽一翁

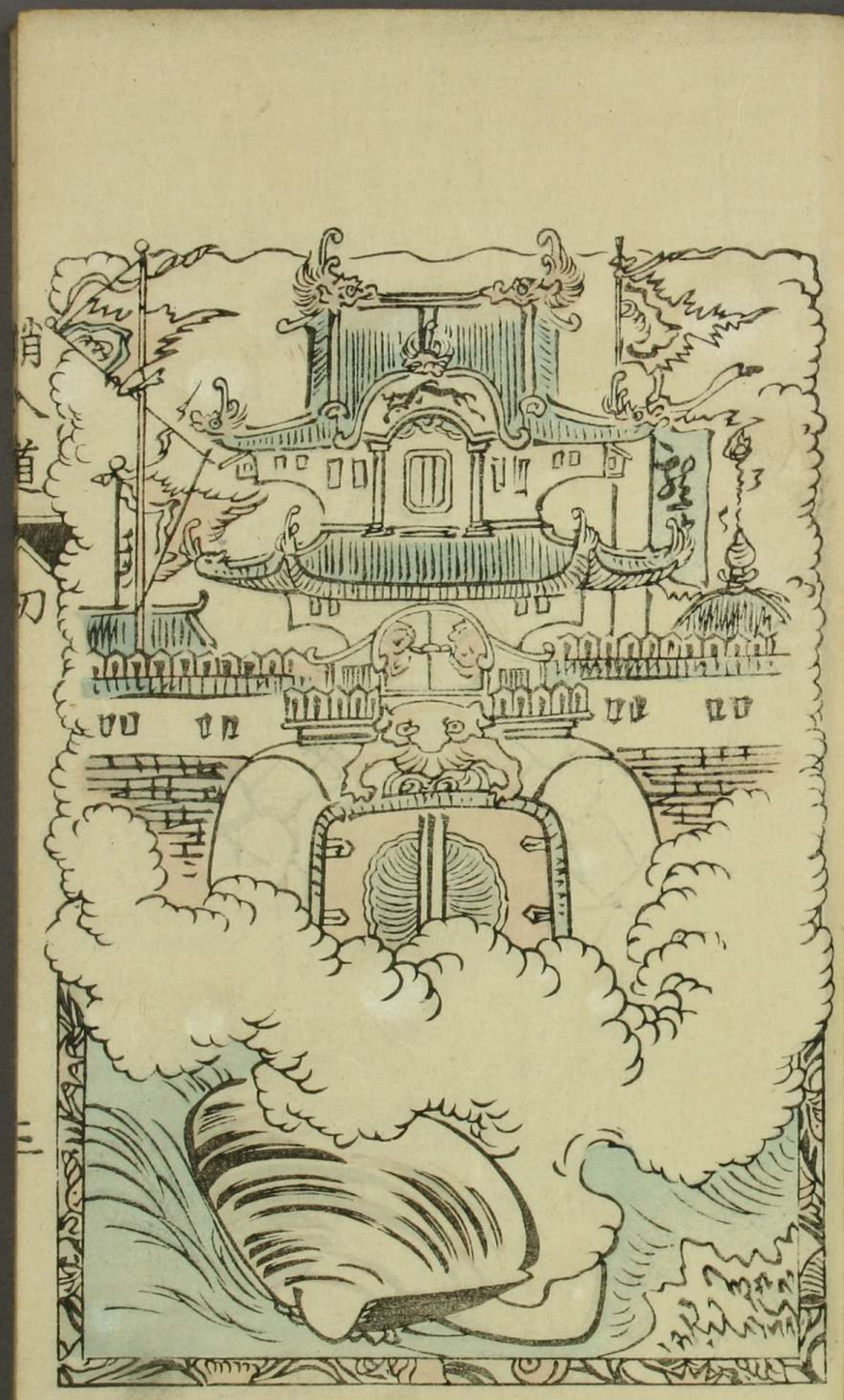
蝙蝠傘人漫題

大洋新話 蛸入道魚説教摠括

初編
○第一回 龍宮城の大變革
○第二回 魚官員の水浴論

二編
○第三回 鯛博鱗の諫語盡
○第四回 海坊主の蛇宗門

三編
○第五回 蛸入道の教訓話
○第六回 浮漂洲の海化城



凡例

一 此小冊史僕が例の筆頭ゝ成る一時の戯作と雖
看官の注意ゝ因て又開化の一端を踏むに至らん
文章の卑俗まゝ田童野婦に解讀易からんを要
とするのみ

一 無用の書を著述して有用を補全ん僕輩の是と
する所贅語中自然微意あり稗史の卑きを捨ざる
具眼ゝ更に開化の得意ならん

蟲樂師匠
悔と晴れ

魚説教草壹

明治五年申六月

書典存誠閣藏兌

存誠閣藏書

蛸入道魚説教初編

東京　假名垣魯文著

第一回

大地球東洋の海底ゆ龍宮城あり大古地神四代の天孫彦火出見尊天釣針を索ねて海水を潜り此龍宮ゆ入給ひて龍王の御女豊玉姫を娶り給ひ鸕鷀草葺不合尊を産し給

ひしよう父龍王神孫の外戚たる故を以て
龍神の尊稱を給り滄溟原を浮漂洲と名づ
けたり是ハ古事紀傳ゆ所謂開闢之初洲壤
浮漂猶游魚之浮上也云々の紀文ゆ因てゆ
り此由來を以て代々の龍王深く神國の風
儀を慕ひ鱗世界の政令ゆ諸事大皇國を
摸範として魚則魚法を立來りし以降幾于

の星霜経て人王二十七代の天孫繼體天
皇の御宇丹後國與謝郡管川水江の漁夫浦
嶋其此界ゆ漂流せしゆ其時の龍王從來日
本人を慕ふの餘り息女乙姫の聟として三
百餘年の其間苑き潮風ゆあてる縡おく腸
の玉と愛寵と扶助しける中浦嶋いきたが
ゆ故郷忘ド難く強て歸國をもとひしかが龍

王父子い名残を惜み餞別として什寶の玉手箱を彼ゐ与へ歸朝せしめ其後ゐ粟津の冠者田原藤太を請待し其折も数の宝を授ちし事是皇國を敬尊の證ととそれ知らるゝ時于時兩國橋吾妻橋の中央ゐて善根功徳の人ゐ出會し放し亀をおし鰻等龍宮界へ立歸り水ゐ浮世の新聞を云々と言上せしかゞ龍王遠き御耳を傾けて聞し召き青々の鱗を召し集へ火烟の如き息繼ぎあへぞ駭然たる龍顔の汗を拭いて曰ふやう汝等聞らぞや方今人間界六大洲中の各國競ひて舊幣を一洗し文運を隆盛ゐし理學を研究し政令を改革し發明を一新し文明開化の域ゐ臨み君民一和して國を護り知

覚をひらき知識を博め従事ゐ進歩の最中と聞けり柳我浮漂の洲遠く人界を隔て深く海底ゐ自立し人倫魚鱉の異るあるを所謂句外中立の方を守りて人界の開化を高海で見物せんゐ豈妨げの有るべからんと思へども待て暫止海底地下の境界い地獄領と連りて僅ゐ劔針の山脈を隔つるの

を夫無佛世界ハ閻魔王國一ゐ預弥國と名づけ閻浮提今所謂大地球の南金剛山の内ゐあり閻羅王の摠括もる處一百三十四界あり其臣十八人百万の衆を領て閻羅王じかし此沙國王さりし時常ゐ維陀始生王と戰ふゐ利あらぞ因て誓願して地獄の主とおり漸々ゐ版圖をひろげしより今ぞい沙

降ゝ富貴

婆ゆも飛地の領分密ゆありと聞傳へり斯
もべ外面ゆ親睦と盡をと雖内心如何ある
蜑食の意を含まんも量りがたし殊更南ゆ
太平洋西ゆ大西洋の二大海あり其海底の
各龍王疾くる人界の開化を聞知り各龍洲
ゆ固陋を改め海化ゆ進む時ゆ至り我浮漂
洲のゝ安閑と海中ゆ孤立せば版圖忽地隣

境ゆ併合らもおんこと必せり朕從來雲を
呼び雨を降らもとのゝ天帝報恩の要勢と
心得自已龍神と僭上し或時い前殿の浪間
ゆ出を四季の花貝を合或時い後宮の蜃氣
樓ゆ登りを海馬の曲騎を上覽し魚肉の味
ゆ飽を得難き人魚を食せんことを思ひ猶
も驕奢の止まらず年來水虎ゆ申つゆ水游

ぎもる人間の屁子玉を穿拔らせ佃煮とし
て滋養の食とし殘忍酷烈の甚しき懶惰放
逸の勝もれる先非後悔限りなしさもぐと
そ上を傲ぶ部下の鱗定めし朕が眼を盗み
龍眼肉の名を設け食せんことを思ふも有
るべし朕昨日人間界より立歸りし亀鰻等
が言上せし江湖上の新聞ゆゑ茲ゆ悔悟の

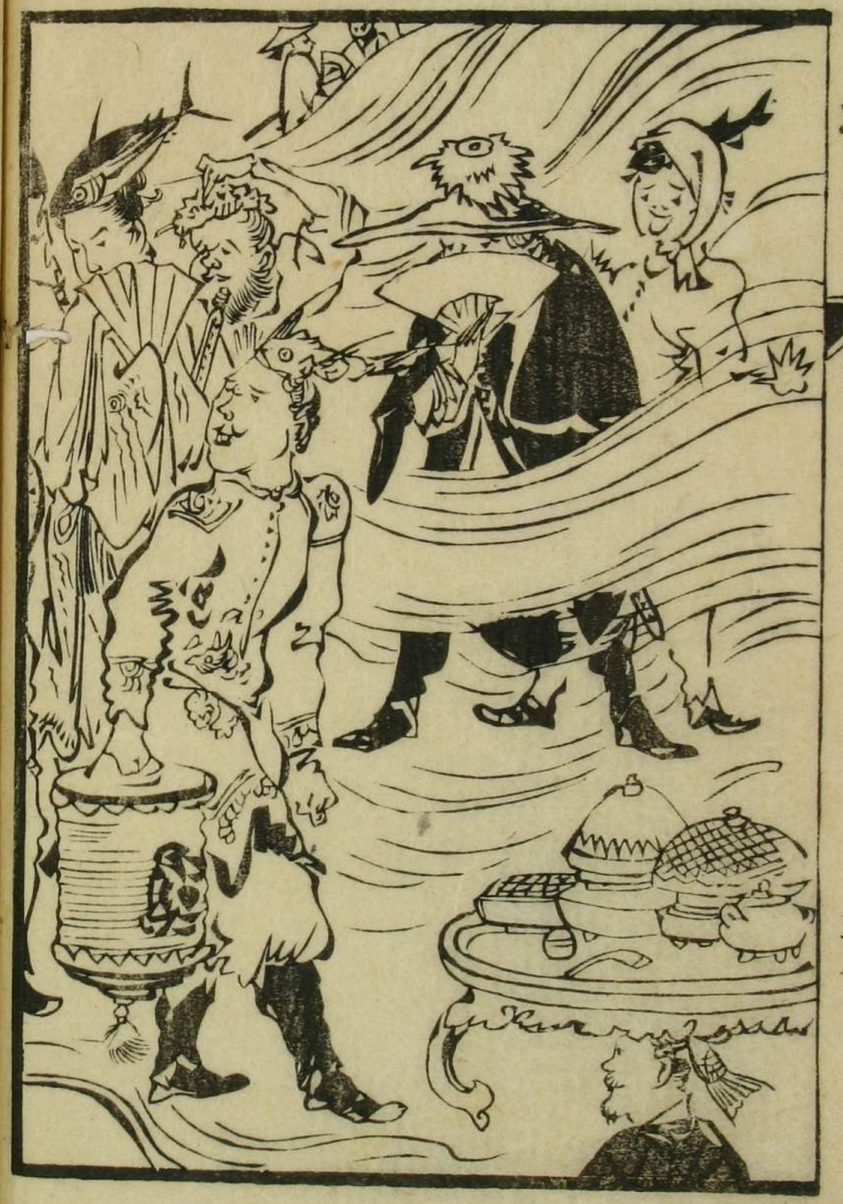
眼を開き一身の弊害を御濟川の流ゆ淨め
君民共治の政體ゆ倣ひ龍魚交游の政事ゆ
歸せんを只管ゆ急勢とせんとそ此上い汝
等も水ゆ浮き餌を求り漁船の網ゆ羅り釣
夫の針ゆ腮をつるし魚籠の中ゆびくく
もるのゝ面目ゆいあらざるべし今より魚
鱉の海化ゆ進み彼北溟の鯤の如く青雲の

時を得て大鵬と化し九万里の翅を翻すこと
とゝ注意せよと大憤發の御氣色龍顔に顯
はせば諸々の鱗等鰭を縮め尾を低ぶ
轍の鮒や釜の魚怖れを入て退出せり

第二回

却説龍宮城にて鱗の諸大臣今般龍王の
命を奉ず俄に海洲大變革の集議院を設け

つゝ各諱忌なく存意を演同心協力商議を
爰に魚民の知覚を弘むるの布告を出さん
結構かるも兎角に舊弊染込たる魚官貟
の水掛論因循姑息を狩あかぬ時計の四字
を待合せ退出連の途中から近來流行人力
車を摸せ魚力の車艘波を蹴立てゝ新海原海
門口から下りて入る魚街の引手茶屋尻子



玉屋と掛行燈ゑ烏賊の墨ゑて書たるい水
虎の妻の巣穴と見るうち胡瓜の肌ゑ似さ
面の菊石ゑ笑凹ゑつちゑらゑる水虎の
妻君目疾く見つけコレハ鱸さま鮴さゑか
打揃ひぞろうとそか出まづ二階へとをを
去りの少女が案内のとん〳〵柏子か茶ヨか
菓子と饗應振り水虎の妻い反歯の口元を

ゞめを莞尓愛敬つくろひモシ鱸さまも鮴
さまも昨夜との滄妓へも約速をございま
したゞ昨夕から鰄どんがか迎ひの百度參
りコレく鰧魚や洲崎へ行ッを鯢さんと海
鰍さんのゑ坐敷と仕舞ッをきかをして次
手ゑ見番ゑ鯉とかゝをと板目ゑき指揮
の中ゑ鯉鶏から持込む臺の友食ゑあしを

いたゞく蛸ざかな飲もゝ酬いと機嫌へイ今晩いと鯨舎の撥撥弾出も三絃の金絲魚ゐ坐敷を浮かも浪の音二挺鼓のちりからタツポヽどんどこどんの騒ぎを聞つけたゝかゐ夫ぞと押賣の幇間の鮟鱇ぞつと入り二階の梯子バタ〳〵見附さくモシ佳魚此鮟鱇へ沙汰なしの怨きい後刻先一杯

のたゞき鰯鮭魳鰊鰹と悪く古風ゐ洒落のめゝ肥満さ腹の餅搗ゐ娘分の小鯛臍を抱へ咄と笑ひを立汐ゐ迎ひの新造海鰹ゐ誘引き〳〵どやく〳〵従を行水の流ゐ乗る魚心龍宮城の議事院へ無實の論ゐ日を暮し有名樓の掛額ゐ画きし貝化の蛤を品評めし大七の鯉濃汁ぞ飲む酒宴の集會一六定

例毎日ぐんたく斯を空しく日を過さば惡
兵急ある龍王の逆鱗近きあるべしと一
の大臣鯨が心配今日い弥大高議魚官員の
總出仕と逆しゆうを鱗等列を正しを相
詰けるい正座ゆうびとる鯨大臣細き眼ゆ
坐中を見巡し怒涛ゆ浮ぶ鐵甲船ゆ等類口
をうち開き言語とろづかゆいうけるやう

扨各り知らるゝ通り先達てより龍宮城下
總を海底改革及び魚民の弊を一洗し文明
海化ゆ至らしめんと龍王叡慮を砕かせ給
ひ魚臣等へ勅命あり我等不肖の鱗ながら
龍城代々の門閥たる故を以て鰐鮫魚ぶん
どゝとゆ大任を侵ををもて此期ゆ因循
せが其罪一身ゆ蒙るべし老年老衰の鯨が

身い龍爪ゆ裂き骨を削らき膏を絞らき皮
肉と共ゆ耻をさらし鯨とおりどせうと等
しく味噌汁の鼎の中ゆ煮らるゝとも
むべき命ゆあら彩ど地球と共ゆ成出れる
此龍宮の衰廢を目前ゆえて其侭ゆ過さん
こととそ口惜けきさきび各今よりしを一
箇の龍宮だましひと振起し憤發勉強海底

ゆ報ふ忠義を尽さるべしと思ひ込んざる
總身の汗い脊中の穴よりも溢きて空ゆ吹
きもぐる潮と化しつ八方ゆ散りを一坐の
魚官ど尾鰭を浸きでかりおり此時傍ゆひ
かえたる鯛い志づかゆ鰭を正し席と進を
を言へるゆう唯今鯨大臣の報海鱗忠の示
諭の條誠恐汗顔の至りおり僕不遜の罪あ

りと雖も壷儀祝悦壽席を缺かぜ故ゆ名ゐ五倫五常の一端を知るとも目今任撰を蒙り徴辟ゐ加へらるる博士の職を奉載せしこと面目三骨ゐ徹し有り難き仕合せなり然るに海洲の事務ゐより諱忌默止する際ゐあらぜ見込の素志逐一ゐ決定建白仕まつらんと漢語盡しで嘆嗟しく尾鰭を張る

演かすたり。

○必竟鯛博士魚官員ゐ對しる何等の議論を吐哉且ハ下の問りゐ分解を聽ぬかし

蛸入道魚說教初編了

大洋新話 蛸八道魚說教 二篇近刻 三篇刊

桃源齋藏板

東京本石町二丁目
賣弘所 簑田精三郎